

文学 偉人たちの足跡を訪ねる

いしかわたくぼく 石川啄木



啄木寄港の地記念碑(宮古漁協ビル)

歌集「一握の砂」などの作品を残した岩手県出身の歌人石川啄木が、釧路の新聞社を辞め、函館を経て上京の途中、宮古に立ち寄ったのは明治41(1908)年4月6日のことでした。

この旅は、老母と妻子を北海道に残し、自分の文学的運命を賭けた悲壮な船旅でした。

碑には、「啄木日記」の4月6日当日の全文が刻まれています。

さいとうこうこ 西塔幸子

女啄木と呼ばれた岩手県出身の歌人 西塔幸子は、女教師である傍ら哀切を込めた1000点以上の歌を詠み、遺稿歌集「山峡」を残しました。昭和11(1936)年6月、川井村江繋小学校勤務を最後に急逝しました。

「灯を消せば 山の匂いのしるくして はろけくも吾は来つものかな」の歌碑が記念館の傍に建てられています。



西塔幸子記念館(江繋9-43)

みやざわけんじ 宮沢賢治



宮沢賢治歌碑(浄土ヶ浜)

郷土・岩手を深く愛し、「雨ニモ負ケズ」「銀河鉄道の夜」などの多くの文学作品を残した宮沢賢治は、大正6(1917)年7月に花巻町有志による東海岸視察団に加わり、宮古を訪れています。

この時に詠んだ、「うるはしの 海のピロード 昆布らは 寂光のはまに 敷かれひかりぬ」の歌が碑に刻まれています。

よしかわえいじ 吉川英治

「宮本武蔵」「新・平家物語」などで知られる、作家・吉川英治は、昭和10(1935)年に日本青年文化協会を設立。機関紙「青年太陽」を刊行する傍ら、青年の意識啓蒙のため全国を講演していました。宮古市では同年8月に講演しています。

吉川英治の妹が、本照寺(愛宕)住職の弟と結婚している縁で来宮が実現したものと思われまます。

この時に詠んだ、「寺を出て 寺までかへる 盆の月」の句が碑に刻まれています。



吉川英治句碑(旧愛宕小学校校庭)



山口公民館(山口1-3-14)

山口公民館
やどりぎ
寄生木展示室では、徳富蘆花著の小説「寄生木」に関する資料が展示されています。
黒森神楽展示室では、黒森神楽について、映像や人形でご案内しています。



小笠原善平の軍衣と帽子(山口公民館蔵)

小説「寄生木」
やどりぎ
明治42(1909)年12月、徳富蘆花著小説「寄生木」が刊行されました。
大正5(1916)年4月で43版を数えるほどのロングセラーでした。この「寄生木」の主人公篠原良平は、宮古市山口出身の小笠原善平です。
波乱に満ちた数奇な運命を書き留めて「寄生木」と題し、良平は当時最も人気の高かった小説家徳富健次郎(徳富蘆花)に託して小説化することを頼んだのでした。